哲學研究　第三百二十八號

本佛の哲學（二）

——特に天台に就て——

河合陟明

ii　因果論概說

右に述べた如く、眞如は根本實在として萬物の本體たると共に、先驗的統覺力を有する意識一般なるものであり、古來理本覺と名け予が先驗的覺自體と名くる如き超時空的・超個人的なる純粹自我であるが、同時に其は因果法則を本有する所の超因果的なるものであつて、從つて現象としては因果的に現れるものであるのである。故に物自體に關しては因果の概念や規定も及ばずとなし、以て經驗界の範疇の本體界への適用を拒むべしとなすが如きは、根本的に實在の認識を誤り、既に眞理の圏外に逸脫したるものであるといはねばならぬ。

否一層普遍的意味に於て、所謂純粹理性の推論も實踐理性の行爲も、認識も意志も、論理も倫理も、凡て佛教に於ては廣義における因果範疇に屬するのであつて、之を最も純粹なる形式に於て示すものが卽ち、涅槃經に於て四度びに亙つて反覆せられ、一經の全體はこのテーマを基調として發展したりともいふべき、本有今無偈といふ涅槃の四柱であるのであつて、したがつて茲にいはゆる本有概念の先驗的演繹および經驗的發展の關係も藴在するといひ得るのである。かくして卽ち本有・不有・今有・自有といふ如き有システムが成立ち、而もかゝる有システムとは直ちに覺システムとkorrelativ をなし、所謂自覺的體系の發展とcorrespondence をなすものであつて、否寧ろ同一事を意味し、その具體的內容卽ち實在の本有の質量とは何ぞやといふとき、其が方しく一念三千となるのである。而して茲にプラトーのイデアは如何

にして現實に墮しきたるか、又眞如と無明との關係は如何といふ如き、實相論と緣起論の諸問題も、總て本有の論理と一念三千の內容とによつて展開し又解決されてゆくのである。かくて遂に無作の本有の質量の意味を究めて無始の本佛の譯量に至るのであり、更にその質量の運動の意味を究めて本佛の應現活動を論ずるに至るべく、予は茲に「本佛の形而上學的物理學」 metaphysische Physik を說く、其は所謂質量と運動といふ概念の人格化的極致を示すものであつて、卽ち本佛といふ形而上的絕對者が我が人類歷史といふ如き形而下的世界へのWunder und Offenbarung を說き gratia irre istibilis を說き、所謂 Anspruch といひ Tatwort といひ der fleisch-gewordene Logos といふ如き Heilsauswirkung と Heilsgeschichte とを論ずるのであるが、其も後に讓らねばならぬ。卽ち其は、天台を終つて華嚴批判の半ばに至つたならば、「宗敎的實在の理論と體驗」といふ一章を設け、その中に於て西洋思想的宗敎哲學をも拉し來つて、別圓二敎といふ天台學的範疇のもとに批判を試み、こゝに古今の史上の (Gorgean knot たりし「神の quid juris と quid facti」とをまづ嚴密に Analyse すべきを論じ、次でその Synthese 又は Dialektik として、まづ認識論上「眞如本覺と本佛本覺」といふ本覺思想のコペルニクス的轉回を概說し、さらに體驗の立場に出でて、而もこの二種本覺はかく明晰に區別すべきにも拘らず、其が等しく眞如の場所の歪みとして成立し體驗さるゝため、こゝに佛敎史上の紛亂を釀し來つた所以を解剖しかつ解決する際に述べよう。今はまづ抑もかくの如き本佛といふ絕對的實在の認識に達すべき眞理の條件を吟味し、その體系的把握に至るべき範疇的構成の妥當性如何を檢討せんが爲に、まづ佛敎諸家の敎理的展開とその內在的批判を試みてゐるのである。

之に反し、西洋思想史上にあつては、プラトーのイデア論がまづ哲學的純理として輝しきものではあるが、然し其と生命の實在性との問題に關しては、論理的にも倫理的にも因果の理法が明かでなく、一種宗敎的ではあるが寧ろ詩的・藝術的に流れ、次で科學者的なるアリストテレスを經て後に、再び宗敎的なるかつ Mystiker として深遠の思想に達せるプロチノスに至つては、さりながら旣に實在と因果との分裂的傾向を有し、一者の本體界又卽ち神なるものと萬有の現象界とはその範疇をも異に

するとなして、論理一貫せず、所謂十界十如權實の法といふ如き allgemeingültig の Gesetzlichkeit 或は Gesetzmässigkeit を、善惡・迷悟・苦樂・眞妄、いはゆる價値と反價値・有限者と無限者・相對界と絶對界とに、一義的に適用するに至らず――其には深き理由が存する、後に華嚴批判に至つておのづから明かとなるであらう。所謂カント的なる Sittengesetz も、佛教的意味における法爾自然としての自然法卽ち無作本有なる宇宙法の特殊なるものである。而も佛教的自然法はまた一種無作的自然にかつ同時に自覺的自由の意志と意識のもとに、Sittengesetz へと推移發展する。何となれば大自然法たる十如の屬する又は妥當する對象又は本質は、十界といふ人格的なるものであり、其はおのづから九迷一悟・九權一實をなせるものであり、而も實在の根本要請は從迷至悟なる一實諦をなす理念の因果の實現に存するからである。――然るに彼等は未だ嚴密なる純理的推論を實在に就て行使せざるの譏を免れない。かくして近世に於てなほ彼れ古代プロチノスの思想的影響を依然として留めてゐるといはれるカントは、その最も代表的なるものである。彼れが物自體といふ矛盾的謎、然り論理における偶然性の領域あるひは眞理の說明における剩餘領域を殘さゞるを得ざるに至つたことは、まづ純粹理性における致命傷であるが、轉じて實踐理性の分野に入つても、その Unsterblichkeit der Seele とゝひ Willensfreiheit といひ Dasein Gottes の問題といひ、悉く要請にとゞまり、未だ決して玲瓏透徹せる本有の自覺に入らず、無生法忍の眞智に達せず、所謂圓頓の妙理と妙觀といふ無作の實在認識に達せず、無作のノエマとノエシスに達せず。將又その所謂神の道德的證明といふものも極めて脆弱なるものであつて、單に主體的人間にとつてのみ因果を要求するも、客體的絶對の神に就ては曾てその因果的成立といふ如きことが夢想だもされない。神はいかにしてその神としての現實を獲得せりやといふ點に關しての合理的說明が考へられたることもない。佛教に說く如き所謂願行具足の神に非ず、人間歷史、否、九界歷史を經歷してその辛酸甘苦を體驗し盡したる上における轉迷開悟の神に非ず、轉凡成聖の覺者に非ず、衆生性の大經歷を有してかるが故に又一々如實なる一々適應せる救濟活動をなし得るといふ如き救濟者としての神に非ず。然り抑も西洋に於ては神に關する因果の觀念が明かでなく、

絶對者に關する因果の觀念・眞實在に關する因果の觀念が明かでなく、かくの如きことは夢想せられたることもなくして、單なる無爲法・單なる無作本有としての神たる存在といふ根本的「獨斷！」の座に坐してゐるのである。彼にあつては神と人間との論理は會て一貫したることなく、生佛一乘といふ如き根據を會て見出だしたることなき、單なる有神論の信仰であるのである。之果して人文の將來に永遠の命脈を維持し得るであらうか。

然るに天台はカント等とは異り、先にも一言した如く、法性の根柢よりいかにして極果の佛陀に達し得るやといふ事實に關しても、また透徹せる論理と不磨の功績を遺してゐる。而して兩者の媒介卽ち架橋をなすものは、法性といふロゴスのゲネシスとして、且つ其が直ちに（但し自然必然的にではない、自覺的自由に於て）佛性といふノモスのプラクシスとしての因果であるのである。いはゆる因果は觀念と實在との橋梁であつて、之を渡り來つた處に眞の認識が成立つのである。加之、佛敎中最もこの因果を整備したるものは法華經の實相論としての十如是であり、卽ちそれは實在に就て直ちに因果を說くのであつて、その實在とは何ぞやといふとき、其は萬有の本體としては眞如であるが、現象の實存としては十界であり、しかも後者は方しく前者の因果的限定に外ならないのである。而してこの本體的 quid juris と實存的 quid facti との關係を說明する所に、一念三千といふ唯心哲學あるひは色心內含の心的一元の哲學が成立ち、我れはその佛性開發・佛果獲得といふ、所謂成佛といふ理念の因果を實現するが爲に、摩訶止觀といふ觀心の實踐に進みゆくこととなるのである。旣に佛陀卽ち眞の神なる quid facti に就て因果を論ずるならば、翻つてその神の根柢卽ち眞如佛性といふ quid juris に於て之を論ぜねばならぬ。もし前者を Gott selbst と呼ぶならば後者を Gottheit と名くべきであらうか。然るにこの二義の混亂が西洋史、否〻佛敎史に於てすら、從つて東西を通じて人類思想史の根本無明をなし來たれるものであるのである。而して今、予の論說はこの根本批判に向つて步武を進めつゝあるのである。而して先には價値完成の佛界のみを單に quid facti と名けたが、今は一般に總ての實存あるひは現存在すなはち廣義に於ての現象的存在を悉く一括して quid facti と名ける。換言すれば其は隨緣眞如としての十界三千をさすのであつて、迷悟・

眞妄悉く含まれてゐる。然し廣義における現象とは何ぞや、また實存とは何ぞや、現存在とは何ぞや。云く佛界は、又は佛陀は、固より形而上的存在であるが、しかし嚴然たる「現象」としての人格實在であり、人格的實存であるのである。故に其は具體的個性を有する具象的存在として、卽ち色心一具の人格として、妙色湛然常安穩たり（大涅槃經）常住安樂有色解脫たる（大法鼓經）ところの超感覺的感覺の對象であるのである。換言すれば佛陀は啻に眞善の實在たるのみならず又美の實在者であるのである。然しこゝには極めて深い哲理が宿されてゐるのであつて、否、加之、佛敎史上、實在の具象性とくに佛陀の具象性といふことに關しては、いはゆる法身常住と報應顯本といふ佛身觀上の根本問題の未解決より由來して、甚しき概念の混雜とテクニックの亂脈が惹起せしめられてゐるのであるから、從つて是は佛敎敎理の全體系を綜合的に考察して後に斷定すべき問題であり、故に後に華嚴批判の時に至つて、此に論及することとする。

今、佛果への必須制約としての因果といふ觀點より、體象二面の關係を一言しよう。元來、眞如は無作先驗的に善惡・染淨・迷悟といふ本質を有し、其を一層人格的範疇に於て把握すれば、卽ち十界性なのである。唯識の種子といふ如き思想も、眞に佛敎といふ如き佛果を理念とする宗敎的意義を發揮せんが爲には、十界性といふ如き人格的概念に上りきたらねばならぬ。世親は既に法華經に就て十無上を論ずる中に、種子無上を說き、しかも第一に之を揭げてゐる。其は發菩提心のことであり、經の藥草喩を引證してゐるが、これ卽ち佛性の義であり、この種子思想を天台はより宗敎的に十界となし、こゝに一念三千の根礎を置いたのである。尠くともこの點に於て天台の實在觀・宇宙觀は人格的であるといふことができ、又かの華嚴家の諸法無盡の緣起といふ如き、單に自然的把握よりもまた一層宗敎的・實踐的であり、道德的である。故に彼は華嚴の無盡因果といふ如き思想と同類のものとしても、十界無盡の感應といふ人格的關係を說き――所謂生佛二者の感應道交は、この特殊的しかし價値的のものである――こゝに顯機につき、冥機につき、亦冥亦顯機につき、非冥非顯機につき（機とは衆生の宗敎心理に名く、フイヒテが Kritik aller Offenbarung に論ずるが如き、その Offenbarung を受くべき心的狀態である）この根本の四句につき、更に三十六句につき、

三業につき、三世につき、十法界に約し、自行化他に約し、遂にその五具に約して、實に六萬四千八百機應といふ、予のいはゆる法界社會の法界歴史をなせる所の精神的相關々係・人格的影響または相互限定作用・所謂 Wechselwirkung を明かにしてゐる。たゞ彼の宇宙觀の歸結は必ずしもこの思想を貫徹せず、卽ち眞に溫かなる人格的宇宙として一貫終始するに至らなかつたのは惜しむべきである。

しかし既に實在の根本的把握が具體的なる十界といふ概念に存するのであつて、その十界なるものをまづ先驗的本質として、卽ち本體の內容として考察するとき、その十界の如是性に內在する作用の法則が、卽ち十如是といふ因果律をなし、其が時に於て又は時として開展するのである。時は因果的發展の形式であるのである。その因といふ所に自由意志が働き、而して自由意志の根柢には更に本源的なる自覺的意識が働いてゐる。否、不覺プラス自覺的意識・不有プラス本有の動向が閃いてゐる。而も其は既に意志である。自覺は自由を基礎づけ、自由は善惡を基礎づける、その選擇と行爲的實現を可能ならしめる。それは性善性惡といふ性に對する修善修惡としての修の原理であり、行爲の原理であるのである。之に對し、因に對する果といふ所に所謂因果律的必然の力が働く、其は自由に伴ひ自由を律するものであつて、吾々の行爲は必然を自由化すると共に自由を必然化するものであり、刻々に自由なると共に刻々に必然なるものである。而して因果は曾て述べた如く、數學的空間を縱に流動せしめて此に人格的內容を入れた歴史的時間における行爲の多項定理である。甲の term を意志したとき、それは自由に始まるものであつても、既に其は乙の term を意志してゐるのである。乙は必然に甲に伴ひ起らずんばやまぬ。因果は行爲の軌跡といふこともできやう。修性二面の關係、否、性修證三段の關係でいへば、根本自覺に根據する自由意志なる因が、實在の純粹形式として卽ち一念の空諦ノエシスとして、予の本有概念における「本來有つもの」卽ち本來知るものとして、認識論的には證の原理であり、實踐哲學上には修の原理なるに對し、因果必然は實在の純粹內容として卽ち三千の假諦ノエマとして、所謂本有概念における「本來有たれるもの」卽ち、本來知られるものとして、知行いづれの領域に於ても性の原理をなすのである。この性卽因果を開いて十如

是となる。而して十如なる因果は一般に如是性そのものの自己充足意志といふことができる。所謂個人的自由・人格的自由・自覺的自由に對して、超個人的なる宇宙生命の絶對意志が因果十如是である。それは普遍的なる自己充足意志であつて、自由なる目的行爲に對し、必然の運行たると共に能力としての意味を發揮して來るものである。又これあるが故に吾々は因果律を自己の目的體系に攝取し、此に乘じて自己の自由なる選擇行爲の目的を實現することができるのである。カントの Kausalität durch Freiheit といひ、du kannst, denn du sollst といふ如き思想は、茲に解決せられてゆくのである。而して無作の本有概念における本能有者卽ち先驗的本能覺性たる一念は純粹形式として空なるがゆゑに、形式の自由は內容の自由となり、卽ち十界性といふ本質そのものの自由となり、又これに對する本所有物卽ち先驗的本所覺藏としての十界性に固有する十如是といふ純粹內容の必然は、內容が必ず形式と合し形式に限定せられ形式へ融通することによつて具體的なる行爲となり意識となり自覺となるが故に、內容の必然は形式に伴ひ形式を律する必然となる、卽ち因果は自由を律する必然となり自由に對して durchdeinandor hindurch なる所の必然力となる。Auto-determinismus こゝに成立つ。一言にいへば十如は眞如の法則であつて、眞如の如なる所以を開出するとき十如是となるのである。故にこれを因如果如ともいふのである。しかも眞如は本來十界性といふ人格的內容を有し、これによつて成立つてゐる、故に十如はこの十界性の十如となる、性に卽し性に屬する十如となる、卽ち十如は十界の屬性であるのである。故に又、眞如を開いて十如となり、十如が一に合し一に如せるものが眞如であるといふことは、十界性が一に合し一に如せるものが眞如である、といふこととなる。かつその十界の如是性は、十界といふ迷悟ないし自覺的發展の價値的差別はあるが、性そのものは固より超個人的普遍の本質であるから、その性といふ質の量化としての因果律、卽ち先驗的本質の經驗的自己限定としての因果律を、一言にして「質量作用の法則」といふことができ、其は物理學的捨象の具體的根本としての十界互具といふ人格的生命の本有の法則であるのであつて、そこに如是性が如是力・如是作・如是因・緣・果・報・等と質より量へ先驗より經驗へ首尾一貫の發展形式に於て自己を充足してゆくので

ある。無作の本有といふ一大根本實在に於て、又それよりしての、transcendentale Analytik 又は Deduktion 或は Ableitung として、其がいかなる本質を有ち、かつ本質がいかにして現實となるかといふ、「有と質と量」の關係を示すものが、卽ち十如是であり、乃至、一念三千であるのである。かくしてその質量作用の發展法則たる十如是は、之を宇宙意志といふことができるのである。

此に於て眞如の內容は先驗的に十界性といふ人格的本質と、十如是といふ作用的法則と、三世間といふ表現的交涉との、相關互具の關係を本有して、おのづから卽ち無作に法性すなはち Gesetzlichkeit を構成してゐる、云く十界互具・百界千如・一念三千、すなはち眞如一理卽一大法性、法性卽性具三千といふ意味に於て、本體論的なる理具の一念三千はまづ茲に成立つのである。其が宇宙生命の無作本有の內容であり構造である。無作者、非二作之法一、非二佛天人修羅所レ作一、理非二造作一、無思無レ念、無二誰造作一、故名二無作一。

かくの如き法性卽ち法界の本性としての眞如が、無明の媒介のもとに或は無明を斷破したる上に於て自己限定をなすとき、其は卽ち經驗的現象として所謂隨緣眞如として、無限なる多元的個としての九界と佛界卽ち十界といふ染淨迷悟の現實的果報を享有する人格的實存となる。こゝに、かの先驗的本體としての理體三千あるひは理具または性具三千に對し、廣大なる經驗界としての事造三千が成立つ。其は吾々の所謂經驗範疇を超えたものをも含むのであるが、しかし形而上的實存たる佛界・菩薩界の如きものでも、所謂諸法無盡の緣起と十界無盡の感應をなすといふことより考へるならば、この意味に於て其等も亦吾々の經驗的內容に入りきたり、體驗の對象となるものであるのである。寧ろ歷史の意義・生の價値は、かくの如き形而上的實在を實證する所に存するのである。歷史は實證の場面であるのである。その quid juris は徹底合理、その quid facti は無限なる神祕、吾々の歷史的生活の眞意味は、理性と神祕との合一・Mystik と Glaube との合一の所に存するのである。其はまた佛敎的意味に於て、佛性論的汎神論と佛陀論的有神論との合一の體驗といふこともできる。而して眞如はその合一を成立たしむる共通の場所であり、所謂 Wechselwirkung の可能なる所以の、十界個々に內在すると同時に超越的なる普遍根柢であるのである。從つて逆にいへば、その

眞如を因位にあつて ascending course として限定すれば佛性向覺となり佛性行善となり、果上にあつて descending course として限定すれば佛陀統覺となり佛果淨用となる。二者が合するときが感應道交である。すべて緣合者名爲ㇾ時、時與ㇾ道合、名二第一義一、それは一般に眞如體驗といひ得るが、特にその緣なるものが形而上的人格としての佛界となり、時者名二感應一といふ如くその感應の korrolativ なる對象も亦、十界中就中佛界なるに至るとき、こゝに先にもいつた如く時は最も宗教的意義を帶ぶるものとなるのである。かくして歷史の意義は、かのコントの如き唯物的・形而下的實證主義には非ずして、所謂「合理的觀念論より神祕的實證論へ」といはるゝ如く、形而上的實在の實證・體驗たる所に存するのである。而してそこには眞如體驗と佛陀體驗との二種を論ずべきものであり、かつその體驗の構造いはゞ吾々の意識の構造は複雜なるものであつて、特に華嚴と天台の緣起思想と感應思想とに對し、且又、唯識學とカント哲學といふ相似的思想をも參照しつゝ、これらに對し嚴密なる論理的分析と批判とを要するのであるが、それも華嚴批判ならびに後篇に讓らねばならぬ。

しかし佛菩薩界等は、單に吾々の體驗の對象となり實證の內容となるといふ意味に於てのみ經驗的であるのではない。佛陀自らが眞如の先驗內容を經驗的に顯現し盡した所の、經驗完成・價値完成としての人格實在者であるのである。それは價値と實在との統一人格として形而上的經驗絕對者である。十界の人格は凡て經驗的なるものであり、所謂事であり現實であるのであるが、その九界とは未だ無明的媒介中にあるものであるに反し、佛界は既に全く之を解脫し、卽ち限定を完了し限定を超越したるものである。其は法性の自覺的人格化、換言すれば破無明三昧としての無限の向上をなしとげて、こゝに全く時を完了し時を超越し、所謂 Endgeschichte としての Ewigkeit に立つたものである。先にいつた如く、其は眞如の本體の原理的超時間性とは異り、一切の限定完了の後における、從つてその限定作用の極限に到達し、否、極限をも超起したる所の、高次の現實として、眞に個性に卽して普遍法界性を有し、あるひは個性に於て法界性を包む所の、人格的叡智の超時間性といふことができるものである。これ卽ち章安が、大涅槃經玄義の劈頭に、

無明生死患累、究竟斯亡、生死永滅、免二斯因果患累一（時は迷妄の影である）因果畢竟、是圓淨解脫（時は希望の影である）論云、智度大道佛善來、智度大海佛窮レ底、卽其義也、智度者、如如智稱二如如境一、函大蓋大、照發相應、故名智度一、論云、智度相義佛無碍、卽其義也（時は永遠なるものの影である、その限定を了りし超時間的永遠者こそ眞の我れである、名けて佛陀の大我といふ）[18]

18　涅槃經玄義上、卍三二ノ九54 55

といふ如く、智度無極・明度無極・開覺自性なる般若波羅蜜を體現せる所の、自覺的絕對・認識論的絕對・ノエシス絕對としての最高人格であるのである。慧觀が「滅影澄神　の涅槃界といひ、「佛法之奧區・窮神之妙境」といふも亦實に之を意味するものでなければならぬ。これが卽ち、佛陀も經驗的存在なりといふことの eigentlicher Sinn であるのである。從つて其は勿論シュライエルマッヘル的に höherer Realismus としての das „quid facti" といふべきものである。

此に於て天台獨步の敎觀といふべき一念三千の構成原理を、一言に點示すれば、その要素的概念は事理・因果・迷悟・依正といふ實在觀上の諸面に亙り、而して之を橫に叙智的空間として配列するときは方に妙樂のいふが如く、

於二一念心一、不レ約二十界一、收レ事不レ遍、不レ約二三諦一、攝レ理不レ周、不レ語二十如一、因果不レ備、無二三世間一、依正不レ盡、[19]

19　止觀五ノ三9

といふ所謂諸法實相としての法界社會の現實的構成となり、之を縱に論理的時間として流動するときは、また妙樂が、

實相必諸法、諸法必十如、十如必十界、十界必身土[20]

20　金錍論

といふ所謂實相四必としての法界歷史の推論式的發展となり、かくてこの縱橫二面を綜合して佛敎敎理の統一と實在問題の解決を試みんとするものであつて、かの具體的一般者といふ如きものの眞の意味內容や本質構造は、こゝに見出だされるものでなければならぬ。

而して先に十如因果は宇宙意志であるといつたが、この場合に於ては其は十界といふ價値と反價値との迷悟の階程十種の人格性に就て、一樣にその自己充足的必然の法則として又能力としての絕對意志を論じ、從つて價値

關係性の如何を問はず、實在發展における形式の不變性かつ普遍性を論じたのであるが、然し眞如といふ宇宙生命の動向は、無明を破り煩惱を脱して不有より本有へ完全なる今有卽自有として自己自身を全現せんとする所に存する、卽ち佛果を開覺せんとする所に存するのであるから、此に於て從迷至悟といふ向價値的因果・向覺因果・一實因果、いはゆる理念の因果の實現こそ、最深の意味に於て萬有普遍のかつ根本的なる宇宙意志であり、生命本有の欲求として、個々に內在する眞如そのものの絕對意志であるといふべきである。されば天台は三大部等を通じて縱橫に因果を廣說するも、就中、法性より佛陀への媒介、所謂觀念と實在との架橋たるものとして十如を詳論し、法華文句に於て十如範疇による實相哲學を講ずるに際しても、初はまづ十如を遍ねく十界各々に約するも、次で佛界に約し、寧ろ成佛道としての佛乘に約し、更に離合に約し、また諸位に約して說き、加之かゝる反價値界より價値界へ、所謂自然の理性化 Natur の Vernunft 化・自覺的體系の發展、すなはち予の所謂佛性向覺の可能なる所以としては、方しくまづ諸法融通の理・萬法一如の相を示さんが爲に、空假中三諦を說き、從つて十如に就て三轉讀文を點示し、之を結んで、その因如果如權實不二といふ一如の一如なる所以を實現し認識し自覺し體驗するものは卽ち佛性なのであるから、かくて差則十法界相、融則一佛界相として、經に所謂、一相一味、解說相、離相、滅相、究竟至二於一切種智一といふ如く、萬法悉く同一眞如の相なると共に、而もその眞如の本有の動向は善への意志・自覺への意志・絕對自覺への絕對意志すなはち佛性向覺に存する所以を明かにしてゐる。これ先にもいつた如く、不レ動レ如而是如、如々不レ動にして而もまた動レ如入レ如ところのものであるのである。妙樂は之を釋して

明二理攝遍一約二十界一釋、明二自證極一約二佛界一釋、明二佛化用一約離合一釋、明二三德遍一約二諸位一釋、(1)

21　文句九24

といふ。換言すれば、初は橫に十界を並列して之に各々十如を論ずるも、然し十界といふ迷悟の差別を通じて十如そのものは唯だ一として普遍するもの一義的に妥當するものであり、逆にいへば、唯一の十如によつて十界といふ種々の差別を呈するのであるから、今や一轉して實在の根源的立場卽ち合目的々又は價値追求的・向價値的

立場に立ち、卽ち十界を縱にとり來つて、迷悟一系列としての垂直線的方向に當爲的・目的體系として全實在を考察するとき、從つて實在界の全體を擧げて以て一大自覺的發展體系とし、佛性向覺の行善體系として考察するとき、かゝる理念實現の必須の制約形式が卽ち唯一の十如といふ首尾一貫の法則となるのである。然しかゝる法則性は必然律であると共に充足意志として自己實現の能力であるのである。これ Autonomie des Willens を宇宙意志の根據に於て貫遂せしめるものである、換言すれば吾々の個人的なる人格的自由の意志を超越的意志の內容に構成し實現してゆくのである。先に明かにした如く、我れの Sollen の Wollen に對して因果の Müssen は Können となる[22]。こゝに予は新たなる形式における如來論の十如是として、その源たるや成實論を巧釋し論理化したる所の如來思想、すなはち如來者、乘二如實道一、來成二正覺一、故名二如來一、是眞身如來也、乃至、來二生三有一、示成二正覺一、是應身如來也といふ如く、一の如に就て境智二如と眞應二身とを巧釋したる天台と、カントとを攝取し來つて、更に之を發展せしめたる「衆生成佛の十如是」なるものを說き、更にその成佛といふ理念完遂の爲の必須の「感應緣起」として——卽ち先に一言した如く、法界三律の第三に當る思寵律として——辭量顯本論に根據する「本佛感應の十如是」なるものをも說き、かくて法華經には方便品の「宇宙原理」論的なる十如實相と合せて三種の十如是ありとなすのである。

22 拙稿、「本覺概念のコペルニクス的轉回」、宗敎研究、第四年第四輯、

今その第二のものに就て先に列擧したる九項十項と成實論及び天台との、one-to-one-correspondence を示すならば、云く乘とは Wollen, 如實とは Mögen (Ursein), 道とは Sollen, 來とは Müssen プラス Können, 成とは Werden, 正覺とは Wissen プラス Sein, (認識によつて實在あり) 或は、Werden に直接して Sein プラス Wissen, (ノエマとノエシス卽ち實在が認識として自覺する、これ眞の實在なり、自覺せられたる眞實在なり、眞の意味に於て自己自身を「有てるもの」なり、「富めるもの」なり、故にまた他を「惠み得るもの」なり、これ卽ち佛果上における事成の法身と報身) 而して更に示成正覺とは Wirken (方しく他を惠む所の應身) を指し、かくて始め Wollen より終り Wissen プラス Sein

に至る從迷至悟いはゆる從因至果としての眞身如來も、はたまた佛陀より衆生に働き來たる從果向因としてのWirkonなる應身如來も、ascendingもdescendingも共にひとしく如來たり、如是來たり、從二眞如實相中一來、覺二如實一また使、覺二如實一、すなはち乘二如實道一して來成二正覺一たり、示成二正覺一たり、いはゆる自覺たり、覺他たり、故に共に如來たり覺たる點に於て二面九項はただ一のGeschlossenをなし、又更に、最初のWollenはaufsteigerndなるWirkenたり、自覺へのWirkenたり、成佛に向つてのWirkenたり、又最後のWirkenはabsteigerndなるWollenたり、覺他へのWollenたり、救濟の爲のWollenたり、かくてErlösungsreligionもHeilsreligionも、自覺敎も救濟敎も、二者全く一に結びつき、自力と他力とは徹底的に合力して、その二面の何れの力をも絶對的に發揮し又は發揮せしめ、以ていはゆる「自覺を與へて」「救濟する」宗敎なるものこそ、佛敎である、といふ意味に於て亦Geschlossenたり、如是本末究竟等たり。かくして成佛の十如是は成立するのであり、更にその最後のWirken.なる如是緣としての一項を開出して、こゝに本佛感應の十如是を展開しきたるのであるが、其は後の機會に割愛せねばならぬ。

23　拙稿、統一（前揭）十一、乃至、十四、

かくして十界といふものの中、迷者としての九界は最後の佛界といふ悟者としての果位に對しての因となり、その果に向つて無限の向上を辿りゆくものとなる。十如の眞意味はかくの如き向覺因果たる所に存せねばならぬ。而して一般的にいへば、十如是とは客觀的には實在の屬性であるが、主觀的には行爲の法則なると共に認識の範疇である。而して又その法則の由來する所の根源および範疇の妥當する所の對象は、卽ち十界といふ人格的實在であり、かつその十界は各々依正二報として五蘊と衆生と國土といふ三世間を有してゐる、それは各自の表現的世界なると共に相互の交涉關係をなすものであるのである。かくて一念三千の基礎たると共に歸結たる十界といふ概念に就ては、常に理事の二面を併せ見るべきであつて、一は本質としての十界卽ち先驗的なる十界性と、他は現實としての十界卽ち經驗的なる十界果とである。前者は潛在的なるものであるが、後者は其が斷えず限定せられ積聚せられて、卽ち十如因果の理に隨つて顯動し

て實存現象となれるものである。前者はカントの所謂intelligibler Charakter に當り、後者は empirischer Charakter に當る。天台は法華經藥草喩品の解釋に於て、この無作本有なる叡智的性格が（但し性善性惡を共に有し、法界無碍、無染而染する所の「理性之毒」なる先驗的惡の根源をも本有する所の、所謂 radikales Böse をも無作に本有する所の、十界互具なる叡智的性格が）、有作今有なる經驗的性格となりゆく媒介過程として、習因習果といふ因果を論じ、就中、價値的・合目的々には三因佛性中緣了二因の佛性の積聚を論じ、其によつて正因佛性としての法性を開發し限定し掘鑿し測量して、人格的濃度・密度・飽和度、すなはち單に möglich ならず potential ならざる wirklich なる叡智的內包量または自覺と善との蓄積量を、增大しゆく關係を、經文に寄せて巧喩巧釋してゐる。云く

一一五陰、皆有二習因習果所依一、猶如二山川谿谷土地一、皆爲二種子質幹等所依一也、又用二三千大千世界一、譬二正因之理一、通爲二一切所依一也、山川谿谷土地、譬二衆生陰界入、果報色心一也、草木叢林、譬二衆生習因一、此三法不二相離一、習依二陰入一、陰入不レ出二法性一、如レ草木依二山川一、山川依二世界一云云

これ妙樂の所謂、陰入・習因・法性、三法展轉相依之相を示すものであり、應云習因、開爲二緣了一、與二彼陰入一、不卽不離、陰習與二正法性一、不卽不離なる關係がこゝに見られるのである。而して方便品の佛性論たる、經の知二法常無性、佛種從レ緣起一といふ中道無相の實相論と佛種開發の緣起論と、所謂眞空と妙有と、或は唯心實相と淨心緣起との關係に就ては、一層詳細に說明してゐる[24]。而してかくの如き三因佛性の開發的積聚の極限に至つて、正に佛陀の三身となるのである。故に三身の身といふは積聚の義なりと古來いはるゝ如くである、法身とは卽ち理法の積聚に名け、法性眞如そのものを身とする卽ち人格的に體現したものであり、報身とは智性の積聚に名け、眞如の如理を如理智とし又は如智としたるものであり、應身とは功德の積聚に名け、智悲一體の悲願に住するものであり、かくて佛陀の事體卽ち人格とは理智悲の三層を內容とし、かつ從つて果上自在なるその限定も可能であるのみならず、否、其を現實に行使しつゝある所のものが卽ち佛陀なのである。

24 文句十八52-53、

同十二25:1、

法性は原理的積聚體系であり、從つて無作の積分概念をなせるものであるが、然し其は先驗的本體として、無相の實相として、所謂無なるものでもあり、零なるものであり、無積聚の積聚・積聚の無積聚といふべきものである。然るに佛陀は之を自覺に於て人格化して高次なる叡智的現實としたるものである。佛陀こそ眞の積聚體系であり、生ける積分概念を形成せるものであり、こゝには何等の理的なる痕跡も殘さぬが、しかし又、事の極みに達したる處には事なるものの痕跡をも亦留めない。いはゆる菩薩有レ行故、見則不二了々一、諸佛以レ不レ行故、見則了々、佛者見二佛性一則了々なるものにして、妙覺累外、妙覺圓滿、果上無レ事、眞常湛然たるものである。こゝに達する發展過程として又は媒介作用として佛性向覺が介在するが、其は理の積分より事の微分化へ、事の微分より事の積分化へ、所謂無作本有の質量の發展、或は質より量への發展卽還元が成立ち、その極限に於て量が再び但し高次的に質に還り質となつたとき、それが卽ち佛果菩提である。茲に攝大乘論の如理智と如量智との、或は體智と用智との、kreisförmig なる運動が見られる、其が意志といひ自覺といふものの Charakterisiik であるのである。それが眞の意味に於て働くものより見るものへ達したるものである。それは論二其横竪一照二無限極一、事の無限大の積聚に立ちながら而も超然として第一義空に悠遊するものである。而して此に於て見二實相理一名二了々一、識二法界事一名二分明一、25ライプニッツの所謂永久眞理も事實眞理も、歴史の不斷の根源も無限に流動しゆく歴史的世界そのものも、如理智も如量智も、體象相卽・理量不二、有無の二面・空假の二諦を、双非し双照して双用自在なるものであるのである。双非理極卽法身也、これに對し双照は卽ち報身、双用はこれ應身といひ得るであらう。理は卽ち有自體・智は卽ち受、悲は卽ち用、佛陀は無作の本有なる眞如法性を受用自在にして受用不盡なるものであるのである。而して理の法性を限定し法性を受用して活動するといふことは、事として十界に應現することであり、（嚴密には佛陀は佛界をなせるものであるから、佛界より九界衆生への應現である）それは從つて啻に理のみならず事の十界そのものをも受用することである。畢竟するに本體と現象と、如理と如量と、眞如と十界といふ、理事二面に亙る全實在を at one

strohe に統覺せるものは、又かくの如き宇宙の全實在を受用することも自在無碍なるものでなければならぬ。然しかゝる佛陀統覺の構造、その quid juris や quid facti に就ては、更に後篇の本佛論に於て精述するであらう。（未完）

25 玄義七下43、53、九上10、文句十一511、九4、玄義六上39

前號目次

社會の成立……淡野安太郎
美的理念と藝術史的理念(下)……井島勉
本佛の哲學……河合陟明
——特に天台に就て——

彙報

倫理學研究會

五月廿二日（土）午後六時半　於樂友會館
アリストテレースの德論　五十嵐明氏

印度・佛教學會例會

六月十六日（水）午後六時半　於樂友會館
天台に於ける「本佛の哲學」批判　河合陟明氏

寄贈圖書

哲學年鑑　第一輯　大阪　靖文社　定價　三圓五十錢
臼井二尙、木村素衛、高坂正顯、高山岩男、西谷啓治、柳田謙十郎　共編

大塚鼎太郎著　梅光傳　宇和島　一二書店
同　義に生きよ　同
同　零に生きよ　同

寄贈雜誌

五月號　全人、思想、法學、回教圈、宗教研究(五ノ一)、文化
讀書新聞、回教週報、哲學雜誌、經濟論叢一、日本學研究、社會學徒、一橋論叢
六月號　思想、全人、政治、丁酉倫理講演集、信濃教育、文化日本、哲學雜誌、法學、文化、回教週報、讀書新聞